



十和田湖のほとりで . . .

紅葉の奥入瀬溪谷沿いの道には沢山の観光客が歩いてきた。その溪谷を経て十和田湖を訪れた。

十和田湖の周りの山々は奥入瀬溪谷同様に紅葉。

しかし、十和田湖のほとりに建つ大きなホテルや旅館のいくつかは閉鎖されたまま。どうしたことだろうか？

昔は農協の団体が

二、三十年前は、稲刈りの終わったこの季節には農協の団体旅行が盛んだっただろう。でも、今、それはない。

生産者米価がどんどん下落している。農水省の試算では玄米六〇キロ当たり一万六千円が必要。しかし、農協が年内に払う概算金は昨年より大幅に下落。秋田のあきたこまちが三千円安の八千五百

円。二六%も下落。

これではいくら米を作っても労賃がろくに出来ない。結局、米作農家の跡継ぎも都会に出てサラリーマン化。農村には年寄りだけが残る。農業後継者はいない。農協も勢いが無い訳だ。

農村の中心部では

十和田湖のふもと、黒石市の中心部の商店街はシャッター通り。農家に勢いがなければ、町の経済も沈下する。更に、モーターゼーションで郊外のスーパーが追い打ち。

都会に出た若い人達は、正社員なら長時間労働。派遣なら低賃金。いずれも旅行には行けない。これでは観光地のホテルもやって行けない。みなさんはどう思われますか？

火の見櫓

黒石市消防団第二消防部屯所
二〇一四年一〇月

所用で青森に出かけ、黒石市で、レトロな火の見櫓を見かけた。三十年位前までは消防署には必ず火の見櫓があった。消防署員は二四時間交代で火の見櫓に立ち、街を見張っていた。

温暖な地方の火の見櫓は、鉄塔の上に吹きさらしの見張り台があった。しかし、冬期極寒のこの地方では四方にガラス窓がある。看板に「黒石市消防団第二消防部屯所」とあった。

インターネットで調べると、この建物は一九二〇年(大正九年)に作られたという。一階は消防自動車の車庫、二階は集会所として使われていたという。向かって右の塔は、ホース干し。ホースを消火作業に使うと泥にまみれる。それを洗って干すのだ。



2014.10.25 徹

来週はお休みします